

# 「クジラ構文」の意味構造と認知的な特徴に関する 一考察

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Semantic structure, constructional meaning, categorization, rhetoric 作成者: 廣田, 篤, HIROTA, Atsushi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00049493">https://doi.org/10.24517/00049493</a>

# 「クジラ構文」の意味構造と認知的な特徴に関する一考察

金沢大学大学院人間社会環境研究科人間社会環境学 博士後期課程3年

廣 田 篤

## 要旨

本論では、Langackerの認知文法の枠組みに沿って、A whale is no more a fish than a horse is. に代表される、いわゆる「クジラ構文」と呼ばれるNo more A than B 構文の下位構文を取り上げ、その個々の構成要素の意味構造から成る合成構造を記述することで、その構文で実際に言語化された「意味論的意味」の構造を明らかにする。その上で、「文全体の意味は個々の構成要素（部分）の意味の総和以上のものである」という構文のゲシュタルト性を考慮した「構文的意味」が、「意味論的意味」とどのような点において異なるのかを検討する。つまり、「クジラ構文」の「構文的意味」に反映している認知の特徴的なあり方には、2種類の互いに対照的なカテゴリー化が関係していると考えられる。最後に、そうしたカテゴリー化の仕方の違いとthanに後続する命題の典型性条件（ここでは、後行命題が明らかに<偽>であるという制約）が、当該構文の「構文的意味」の創発にどのように関わるのかについて議論する。その際、「クジラ構文」という発話における対話者間のやりとりを「レトリック」という観点から捉え直し、それが当該構文の新しい特徴づけであると主張する。つまり、聞き手の誤信念を修正するために「レトリック」が効果的に用いられ、それが構文特有の「修辭的效果」として特徴づけられることを示す。

## キーワード

意味構造, 構文的意味, カテゴリー化, レトリック

## A Brief Study of the Semantic Structure and Cognitive Characteristics of the *Whale-Construction*

HIROTA Atsushi

## Abstract

This paper focuses primarily on how to describe the semantic structure of what is called the *whale-construction* (a subordinate construction of *No more A than B* construction) based on the framework proposed originally by Ronald W. Langacker (1987, 1991). According to the semantic structure models he proposed as a basis of Cognitive Grammar (CG), we will describe the component structures that are combined to form composite structures at higher levels and try to make the meanings of such structures clear. To specify the *missing link* between the construction's semantic meaning and constructional meaning, we will investigate under which conditions the emergence of such a constructional meaning is possible. In the course of the discussion, cognitive characteristics reflected in the construction will turn out to lie in two distinct types of categorizations, and then it will be shown how these two categorizations and the constraints placed on the proposition following *than* (that is, the conditions for its apparent falseness) are

closely related to the emergence of the constructional meanings of the *whale*-construction. Finally, we will reconsider the interaction between the interlocutors in a situation in which the *whale*-construction is uttered by a speaker to confirm that it is newly defined from such a perspective as a rhetorical expression (i.e., “a rhetoric”). That is to say, the speaker effectively uses such a rhetorical expression to change the hearer’s false belief into a true one. This is the distinct function of the construction and should be characterized as a rhetorical effect.

### Keywords

Semantic structure, constructional meaning, categorization, and rhetoric

## 1. はじめに

本論の中心テーマの1つは「クジラ構文」の意味構造の記述である。クジラ構文とは、A whale is no more a fish than a horse is. を代表例とする No more A than B 構文の下位構文の一群を指す。クジラ構文の他の例としては、A dolphin is no more a fish than a dog (is). や A bat is no more a bird than a horse (is). などが比較的有名である。こうした「クジラ構文」は、主に日本の高校英語文法の中で使われるかなり周知的な構文の名称であり、実際にその数も限られるが、No more A than B 構文の意味分析（意味構造の分析）に対して極めて重要な意義をもつ<sup>1)</sup>。本論では、「クジラ構文」の分析を足がかりとして、No more A than B 構文の認知的な特徴を明らかにする。そうした意味で本論は、いわば今後の「No more A than B 構文に関する認知言語学的研究」の端緒として位置づけられる。

「クジラ構文」の発話の機能的な側面である「間主観的認識調整」については別稿で論じたことがある<sup>2)</sup>。その主張の要点は、そうした発話場面における話し手の動機づけは、「クジラは魚類である」という誤信念を持っている聞き手に対して、「ウマが魚類でない」ことを引き合いに出して「クジラは魚類でない」という正しい認識に至らしめるということであった<sup>3)</sup>。しかし、その説得の際に働いているのは、語用論的な含意でも三段論法のようなロジックでもないように思われる。また、明日 (2013) では、「アナロジー」という推

論的概念が導入されているが、本論ではそうした案も採用しない。その理由に関する議論、つまり明日 (2013) の先行研究に対する検討は第2節で行うことにする。

それでは、結局のところ、話し手が当該構文を用いて聞き手を説得する際に依拠しているものは何か。本論の意味構造分析の結果として、その答えの手がかり、あるいは一つの仮説を提示したい。第3節では、クジラ構文の意味構造を分析した上で、その意味構造に反映していない意味、つまり「構文の意味」を検討する。ここでは、Langacker (1991, 2008, 2009) の構文分析の道具立てを用いて、その意味構造をいかに記述できるかについて検証を試みる。文全体の意味は「構成性の原理」に基づくと、部分の意味の総和としての合成によって示されるが、そこでの個々の構成要素は単なる部品でしかない。それに対して、Langackerの枠組みに沿って個々の意味構造を合成することで、全体として「統合された文の意味構造」を表すことができる<sup>4)</sup>。

クジラ構文の意味を「ウマが魚類でないように、クジラは魚類でない」のように解釈する際には、受け手（聞き手）は「XがZでないのと同様、YはZではない」というスキーマ的な意味、すなわち、そうした一定の統語形式のパターンと慣習的に結びついた意味を半ば自動的に想起する。別のいい方をすれば、構文の統語的パターンと慣習的に結びついた意味、すなわち「構文の意味」を我々が認知しているということである。「構文の意味」とは、「個々の構成要素の意味からだけでは文全

体の意味が予測できない」構文特有の意味として規定される<sup>5)</sup>。本論では、認知言語学の観点から、「形式」と「意味」のペアリングとしての記号構造に対して、語彙レベルの意味の合成として得られる意味を「意味論的意味」、より大きな構造レベルでの意味を「構文の意味」として区別する。第4節では、こうした「クジラ構文」の構文の意味が、構文特有の「修辭的効果」をもつと主張する。

## 2. 先行研究とその問題点

明日 (2013: 84-85) は、クジラ構文の表す2つの命題 (thanの前の命題を「先行命題」、後ろの命題を「後行命題」と呼ぶことにする) のあいだの関係は「比例的アナロジー (4項アナロジー)」であるとし、以下のような例文 (と日本語訳) を挙げている。

- (1) Consider, for example, whether or not the traditional abortion rights analogy is good one - namely, that a fetus is *no more* a person *than* an acorn is a tree.

たとえば、中絶権を支持する論拠として以前から用いられてきたアナロジー (すなわち、ドングリが木でないのと同様、胎児は人間ではない。) が適切なものかどうか考えてみよう。

- (2) [...] The proper analogy is therefore: Acorn is to oak tree as embryo is to *adult*.

したがって、この場合に適切なアナロジーは、「ドングリとナラの木の関係は、胚と『大人』の関係と同じ」である。

(1)と(2)は、使用されている語彙の違いはあるものの、客観的にはほぼ同じ関係性について述べた言説である。明日 (2013) は、A is to B as C is to D 構文 (「AのBに対する関係は、CのDに対する関係と同じである」) が (適切な) 「アナロジー」であるという(2)の例とともに、同様の関係を表す(1)の例もまたアナロジーであるとみな

しているが、厳密にはそういえない。というのは、明日 (2013: 85) は、引き続いて「クジラ構文」に見られる関係性を、比例的アナロジー (または、4項アナロジー) の記述法 (A:B::C:D) にしたがって、WHALE:FISH::HORSE:FISHとして規定していることに問題があるからである。比例的アナロジーとは、本来的には、例えば1:3::3:9のように、比例的な4項関係を表す推論的な概念であり、MAMMALS:LUNGS::FISH:Xのような語彙的要素に対する4項関係を満たすXは、X=GILLS (エラ) であると推論的 (あるいは発見的) に帰結するようなプロセスを指す<sup>6)</sup>。また、「比例的アナロジー」について、明日 (2013: 87) は別の規定の仕方も示している。すなわち、「[「比例的」とは、 $p=C:D$ とすると、if  $p$ , then  $q$ の推論から $q=A:B$ という結論を導くことである。』という見方を提示しているのだが、こうした「推論のプロセスを表す表記法」自体が、「クジラ構文」の命題否定の概念とあまり馴染まないように思われる。もし、明日 (ibid.) のいうように WHALE:FISH::HORSE:FISHという表現 (表記法) が正しいと「仮定」すると、表面的な読みでは、「クジラの魚に対する関係は、ウマの魚に対する関係と同じである」という意味になり、それが何を意味するか明確ではない。その上でこの表記法を解釈するならば、if  $p$ に相当する「前提」である $p=C:D$  (ウマは魚類である) が成立しないので、その誤った前提 (if  $p$ ) から導かれた推論的帰結である $q=A:B$  (クジラは魚類である) も同様に成立しないという意味に解釈される。実際、明日 (2013: 88-89) では、「[「クジラの公式」の背後で働く推論では、誤った前提から誤った結論を導いているが、結論が誤りであることを先行文脈で示すことによって初めて推論自体の誤りが明確になるのである。』と主張している。これは、先行文脈によって結論 $q=A:B$ が誤りであることが予測されていることが、構文の意味を適切に解釈する上での文脈的な支えとして重要であるということである。明日 (ibid.) の例文を見ると、確かに先行文脈の役割の重要性は否定できない。しか

し、聞き手が実際に構文の意味をどのように解釈するかを考えたとき、先行文脈から結論 $q=A:B$ の誤り (e.g. クジラは魚類でない) が分かっている上で、前提 $p=C:D$ の誤り (e.g. ウマは魚類でない) を基に、そこを起点とした「推論」によって、先行文脈から予測されている誤った結論 (i.e. クジラは魚類でない) に至るといふ筋道を辿るのだろうか、と疑問が生じる。つまり、先行文脈の支えを強調するあまり、前提 $p=C:D$ の真偽に関わる認知が等閑視されはしないかと思われる。むしろ、前提 $p=C:D$ として採用される「明らかに偽の命題」こそが重要であり、それが構文特有の際立った「修辞的效果」を生じさせる要素の一つであると主張したい。本論では、「クジラ構文」の本質は、推論や言外の意味ではなく、むしろ意味論的意味あるいは構文の意味として伝えたいことを直接的に表現していることにあると考える (第3節で見ると、少なくとも「クジラ構文」の意味構造を明確に記述できる以上、本論では、「クジラ構文」を単独で捉えたときに文脈を限定して議論を進める)。さらにいえば、明日 (2013) と本論の決定的な違いは、明日 (ibid.) の比例的アナロジーの表記法には、No more A than B 構文の more と than の意味が反映されていないのに対し、本論では構文の個々の意味構造の合成を通して、more と than の意味の寄与も捉えられる点にある。したがって、はじめに設定した明日 (2013: 87) の「アナロジーの表記法」に限って言えば、そこで前提とされている「仮定」の妥当性は低いという見方をとらざるを得ない。結局のところ、例文(1)と(2)は、客観的にほぼ同様の叙述内容を述べた言説ではあるが、それらに反映した認知的な捉え方はそれぞれ異なるのではないかと考えた方が自然である。「クジラ構文」に反映した認知に関しては、第4節で再び議論を行う。

### 3. クジラ構文の意味構造

実際の構文分析に先立って、Langackerの分析手法に対する基本的な考え方を確認しよう。

Langacker (2009: 60) では、以下のように述べられている。

To describe a construction fully, one has to specify:

- (i) the meaning of each component element;
- (ii) how these meanings are integrated to form composite conceptions at different levels of organization; and
- (iii) how the construction relates to others (its position in intersecting networks of constructions and constructional variants)

簡単に言えば、(i)文の構成要素の1つ1つの意味を明らかにし、(ii)それらが組み合わさってどのような意味になるか (どのような合成構造をとるか) を導き出し、(iii)その文 (構文) が広域的な構文ネットワーク上のどこに位置づけられるかを示す、ということである。本論では(i)(ii)のみを扱うことにする<sup>7)</sup>。

#### 3.1 構文の各構成要素の意味構造

クジラ構文の各構成要素に対して、以下のように(a)から(g)までアルファベットを割り振り、まず、それぞれの意味構造を記述していく。ただし、名詞類のグラウンディング要素 (不定冠詞のa) については、図が複雑になりすぎるのを避けるため、省略する<sup>8)</sup>。

(a) A whale (b) is (c) no (d) more (e) a fish (f) than (g) a horse (b') (is).

##### 3.1.1 (a)a whale, (e)a fish, (g)a horseの意味構造

名詞類 (クジラ構文の参与者) は、円で表示する。各円がそれぞれ太線になっているのは、それ

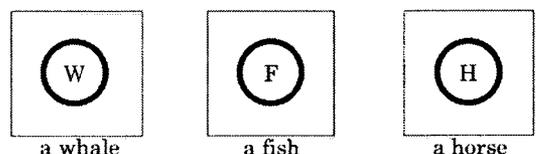


図1: A whale, a fish, a horse の意味構造

らが「プロフィール」されている（すなわち、「際立ち」の高い要素である）ことを表す。

### 3.1.2 (b)isの意味構造

図2では、小円で示されたトラジェクター (tr: 注目する場面の中で最も際立ちの高い参与体) である参与者が、小四角で表示されるような「状態」にあることが、両者を垂直方向の点線で結ぶことで示されている。また、それらの「時間的關係 (temporal relationship)」, すなわち、トラジェクターが「ある状態」にあるという関係性が時間軸に沿って継起・展開していくことは、水平方向の時間軸上のプロフィール及び中段の水平方向の点線で示されている。

### 3.1.3 (c)noの意味構造

Noは比率的数量詞 (Proportional Quantifiers)

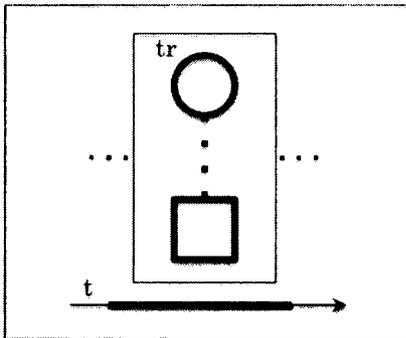


図2 : is の意味構造

の一つである。図3では、Et (Maximal Extension : 最大拡張) として楕円で描かれたタイプ全体に占めるプロフィール部(P)の「割合がゼロ」であることを、「打ち消し (cancellation)」という心的操作を表す中央のバツ印で示している。つまり、図3は、あるタイプに関して、想起される事例全体の集合に対するプロフィール部の割合が「ゼロ」であることを表している。同じ比率的数量詞であるall, most, someとnoを比較すると、こうした数量に関する規定の仕方の有効性がわかる<sup>9)</sup>。

### 3.1.4 (d)moreの意味構造

Moreは名詞、形容詞、副詞のいずれかを修飾する要素であるが、それらのスキーマを抽出する準備段階として、例えば、以下の3つの文を考える。

- (3) X has more books than Y.
- (4) X is more beautiful than Y.

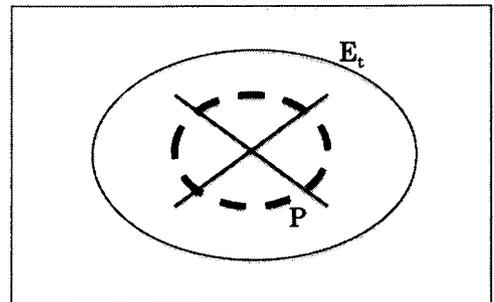


図3 : no の意味構造

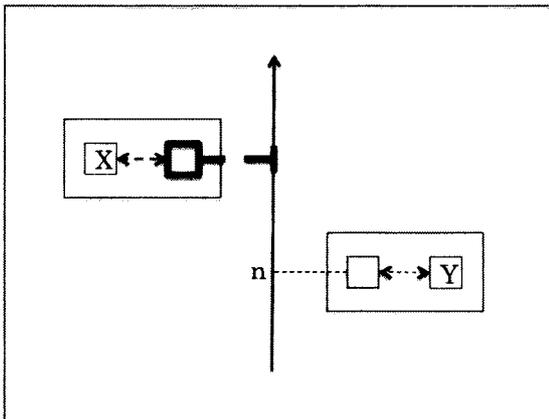


図4

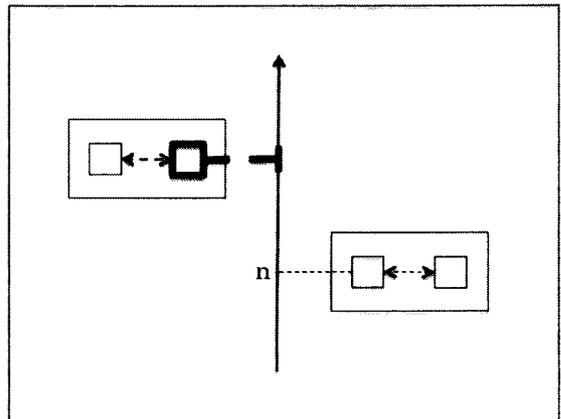


図5 : more の意味構造

(5) X could finish the job more quickly than Y.

図4に示した通り, (3)の文では, Xが所有する(「所有」の意味を双頭点線矢印でスキーマ的に表示)本(太線の四角で表示)の数がYの所有する本の数よりも多いことを垂直方向の尺度上の上下関係で示している。(4)の文では, Xの美しさの度合い(XとXの美しいという「属性」を示す最も小さな太線の四角が, スキーマ的な双頭点線矢印で示された「インタラクション」によって結ばれている)が, nで示された基準(norm)であるYの美しさの度合い(YとYの美しいという属性との関係)よりも, 上であることを示している。(5)の場合もほぼ同様である。したがって, これらの事例からスキーマを抽出するとすれば, スロットXとスロットYをより抽象化して描けばよいため, moreの意味構造は図5のようになる。

### 3.1.5. (f)thanの意味構造

Thanはmoreと共にmore A than Bの形式になる場合, ある尺度上の関係において, thanの先行要素(tr)が後行要素(lm)に対して相対的に上に位置することが図6で示されている。一方, lessと共にless A than Bの形式になる場合は, lessの意味と連動してthanのtrとlmの垂直方向の相対的な位置関係はtrがlmより下の関係になる。そうすると, thanの意味構造の表示の仕方が2通りあることになりそうだが, ここでは「lessの意味と連動して」という点が重要であり, 正確には, 意味構造の合成の結果として, 高次レベルでmore A than Bとless A than Bの差異が顕在化すると考える。ただし図には, 便宜上, スケールを表す垂直方向の矢印の上に「+」の記号を振ってある(なお, thanの認知図を描くにあたり, Langacker (2008: 116)の形容詞, 副詞, 前置詞の図を参考にして<sup>10)</sup>。)

また, 図6のランドマーク(lm: 注目する場面内でtrに次いで際立ちの高い参与体)のボックス内の太線のプロファイル部は, 「クジラ構文」の場合の表示である。Thanの先行要素内(trのボックスの中)で, ある対象の尺度上の位置がプロ

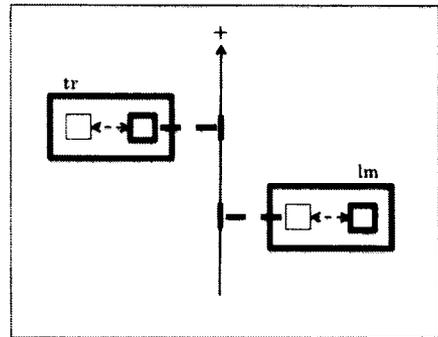


図6: than (+ NP)の意味構造

ファイルされ, それと比較される後行要素内(lmのボックスの中)で, 対象とその尺度上の位置がプロフィールされる。

### 3.2 各構成要素の合成構造

前節で, クジラ構文の各構成要素の意味構造を記述したのを基に, 次はそれらを合成して導かれる文全体の意味構造を記述する。図7の最下段の6つのボックスは構文を形成する各構成要素であり, 中段のcomposite structuresに対して, component structuresと呼ばれる。ただし, 紙幅の都合上, 中段最左のa whaleのボックスも最下段のcomponent structuresと同次元のつもりで描いてあり, また, 最下段の'a horse'と'is'は既に合成された形で示してある。合成構造は, さらに中段がcomponent structuresに切り替わり, 最上段のcomposite structuresを形成する基盤となる。各ボックス間の実線矢印は, 「スキーマ(事例化)」の関係を表す。また, グレーの色付きボックスはelaboration site/e-site(精緻化サイト)であり, 細い点線で表示されたcorrespondence line(一致線)で結ばれた先の要素が, その中をelaborate(精緻化)するという関係を表す。その精緻化の方向は, スキーマから(その)事例へ向かう実線矢印の方向とは逆向きである。つまり, 「具体事例がスキーマを精緻化する」と考える。さらに, ボックス内の太線はプロファイルを表し, ボックスの外枠の太線はそのボックスを構成する要素がprofile determinant(「プロファイ

ル決定子, つまり, より高次の構造に継承される成分構造で, 各々のレベルの主要部) であることを表す。クジラ構文は, 「ウマが魚類でない」と「クジラが魚類でない」こととの「差分がゼロ」の関係を表すため, そうした「関係自体」を表示するbe (動詞) がprofile determinantである<sup>11)</sup>。中段のnoの否定のスコープは, 最大拡張と一致線で結ばれた細線で囲まれた長方形に相当し, 中段のprofile determinantである時間的關係から時間性を捨象した部分にあたる。Be動詞で表された時間は絶えず流れており, 関係性の基盤には常に時間の流れがあるため, noは時間軸上の関係性のみを否定 (キャンセル) する。その結果として, 最上段において, 「魚類でない」という否定 (斜めの二重線) と, 先行命題と後行命題の「差分がゼロ」であるという否定の, 二重の否定の意味が同時に表されているが, こうした意味内容の全てが, 意味構造の合成の過程で完全に明示されているわけではないことに注意が必要である。先行命題と後行命題に含まれる否定の意味 (斜めの二重線) が意味構造の記述のレベルで (「意味論的意味」として) 精確に記述しきれないのは, noの意味構造がそもそも合成構造の記述

のために提示されたものではないことに起因するか, あるいはそうした否定の意味は「構文的意味」の一部に含まれると考えられる。

いずれにせよ, 図の最上段の構造が, 構文の部分の意味の総和以上の意味に相当する。先に述べたように, それが文字通りの「意味論的意味」を表していれば問題はない。この図を見る限りでは, Langacker (2008: 60) の構文分析手法に基づいてcomponent structuresから各々の意味を合成すると, 「ウマが魚類でないように, クジラは魚類でない」という「意味論的意味」は, 最上段の意味構造として精確に表示されているといえる。図には反映されない意味的な側面, つまり, 両者がどのレベルで魚類では「ない」のか, どのような仕組みで「同様に魚類でない」の意味になるのかは, クジラ構文の統語形式と慣習的に結びついた「構文的意味」の中に含まれる。「構文的意味」は「意味論的意味」とは異なり, 「構成性の原理」からは導き出すことができない。そこには, 話し手の認知 (捉え方) が反映しているからだが, クジラ構文に反映した認知については, 次節で議論する。

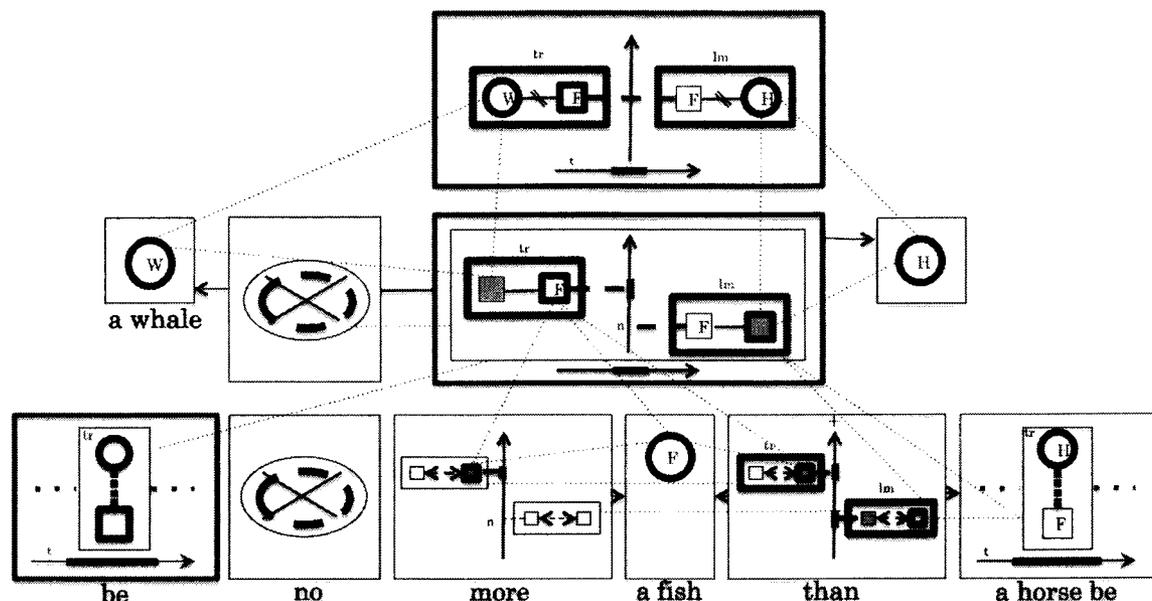


図7: A whale is no more a fish than a horse is. の意味構造

## 4. クジラ構文とカテゴリー化

前節では、クジラ構文の意味構造がどのように記述されるかを詳細に検討した。その結果、クジラ構文に関して、意味構造の記述によって「意味論的意味」は表示できるといえる。今節では、「ウマが魚類でない」という場合と「クジラが魚類でない」という場合では、カテゴリー化の仕方（つまり、話し手の捉え方・認知）が異なることを主張するとともに、「構文的意味」がどのようなメカニズムで創発するかに関して考察を行う。また、そうした「構文的意味」を反映した構文全体の意味構造の背景としてカテゴリー化に関わるのではないかと主張する。

### 4.1 2種類のカテゴリー化

認知言語学で扱われるカテゴリー化のタイプには2種類ある。1つは、「古典的カテゴリー観」であり、もう1つは「プロトタイプ・カテゴリー観」である。前者においては、「真理条件的」に対象（e.g. ウマ）があるカテゴリーの成員（e.g. 魚類）に含まれるかどうか明確に区別される（つまり、ウマは魚類であるための必要十分条件を明らかに満たさない）が、後者では、あるカテゴリーの成員（e.g. 魚類）に対して、そのプロトタイプを基準として、対象（e.g. クジラ）がプロトタイプにより近いのか、あるいは周辺例により近いのか、という当該カテゴリーに対する「帰属度」を問題とする。実は、こうした「認知の仕方」の違いが、クジラ構文の先行命題と後行命題のそれぞれの意味に反映している。これらは「構文的意味」の一部であるため、図7にはこうした側面は反映していない。つまり、クジラ構文にはカテゴリー化という事態把握（捉え方）に関わるといえる。それを踏まえて、カテゴリー化の仕方の違いが「構文的意味」の創発とどのような関係にあるかについて、以下で検討する。

### 4.2 クジラ構文の構文的意味と認知

クジラ構文の表す客観的な意味内容にカテゴリー

化という construal（捉え方）を加味した当該構文特有の「構文的意味」に関して、その創発を動機づけるメカニズムを端的に表現するとどうなるか。さしあたり、それは「レトリック」である、という見解を提起したい。「レトリック」の定義は様々になされているが、本論では「説得のための話法」という意味でその用語を使用する<sup>12)</sup>。クジラ構文には、聞き手の誤信念修正のための「レトリック」としての意味合いがある。重要なのは、当該構文が「レトリカル」な意味合いを帯びるメカニズムである。構文の統語形式自体から「差分がゼロ」の意味解釈は可能だが、それだけではクジラ構文は「レトリカル」な表現にはならない。というのは、それは単に比較される二つの命題のあいだに差異はないことを述べるに過ぎないからである。No more A than B 構文の事例に多くあたっていると見えてくるのは、than以下の要素（後行命題）に一定の制約があることである。つまり、than以下には「典型的に（明らかに）否定的に解釈される命題・事物」しかとらないのである。例えば次に挙げる例文は、いずれもそうした解釈が妥当であることを示している<sup>13)</sup>。後行命題には、(6)のように真か偽かという百科事典的知識に照らして明らかに<偽>である突拍子もないものが選ばれたり、(7)のようにさらに文脈の助けが必要になるものが選ばれたりする<sup>14)</sup>。No more A than B 構文には(6)と(7)のタイプの事例が数多く見られる。いずれの場合も、than以下の命題・事物は明らかに<偽>であり、それが<偽>であることは、百科事典的知識に照らせば自明なのか、あるいはさらに文脈の理解に支えられて自明となるのかの違いはあるものの、両方とも「古典的カテゴリー観」に基づく捉え方が基盤となっている<sup>15)</sup>。

(6) He could *no more* understand what went on in a twenty-year-old's head than fly to the moon. (BNC)

(7) She's *no more* sick than my big toe.

Whenever there's a whiff of trouble she

takes to her bed with the asthma. She has books and sweets hidden up there. (BNC)

(6)では、「彼」がすることのできないものとして、「二十歳の若い娘の頭の中で何が起きているか理解すること」と「月まで飛んでいくこと」が同一の次元で比較対象になっている<sup>16)</sup>。人間である「彼」が月まで自力で飛んでいくことは明らかに不可能(<偽>)である。(7)で比較されているのは、「彼女」の具合と「私の足の親指」の具合である。文字通りの意味で「足の親指」の具合が悪いという状況はかなり特殊であり、通常は、「足の親指」は明らかに機能的に問題のない対象であるといえる。実際、後続文をみると、「彼女」はちょっと何かあると喘息を理由にベッドに行くが、それは実のところ、そこに隠してある本とお菓子を享受するための行動であることが示唆されている。したがって、これは文脈の助けを得て、後行命題が<偽>である場合の「レトリック」として解釈される。

クジラ構文においては、そうした制約は「ウマは典型的に(明らかに)魚類でない」という形で具現している(後行命題におけるカテゴリー化は古典的カテゴリー観に基づくため、ウマのカテゴリーが魚類か否かに対して真か偽かの2値的な峻別が行われるという意味で、結果的に「ウマが典型的に魚類でないこと」について言及することになる)。つまり、「ウマが魚類でない」という「自明な真理」と、「クジラが魚類でない」という(少なくとも聞き手にとっては自明ではない)命題のあいだの「差分が実はゼロ」であるということであり、その意味において「クジラが魚類でないことも明らかだ」というレトリカルな主張になるのである。クジラ構文の文字通りの「意味論的意味」が、「レトリック」として使用される背景には、実は、後行命題の典型性条件に関わる制約とカテゴリー化(認知)の仕方の相違を反映した「構文的意味」の創発が関わっている。つまり、後行命題の典型性条件とカテゴリー化の仕方の差異を反映した「構文的意味」が、聞き手の「説得」にお

いて「修辭的効果」をもつということが、「クジラ構文」の特徴であるといえる。

## 5. 結び

本論では、主にクジラ構文の意味構造の記述に関して議論した。個々の構成要素の意味構造やその合成構造の記述を通して、当該構文の「意味論的意味」と「構文的意味」の違いを確認した。本論の主張では、両者のあいだのギャップを埋めるものは、後行命題の典型性条件とカテゴリー化の仕方の違いを利用した「レトリック性(修辭性)」である。さらに、クジラ構文の発話において見られる話し手による聞き手の「説得」の根拠として、そうした「修辭性」が措定されると主張した。今後は、No more A than B 構文を「レトリック」という観点から見直し、構文全体においてとりわけ重要な位置を占めるクジラ構文の分析を基に、最終的には構文ネットワークの構築を目指して研究を進めたい。

### 【注】

本論は、前指導教員の中村芳久先生、現指導教員の堀田優子先生の忍耐強い指導の賜物であり、さらにKWON, Hee Jung先生には英文アブストラクトのチェックのほか、度々ご助言を頂いた。また、査読者の先生からは細部にわたり貴重なご指摘をいただき、本論を修正する上で大変参考になった。ここに改めて感謝の意を表したい。

<sup>1)</sup> 平沢(2012)では、「クジラ構文」という名称を、より広く、より多様なNo more A than B型の文に対して適用している。本論では、カテゴリーに関わる、統語的にNo more A than Bの形式をとる構文を「クジラ構文」として扱う。

<sup>2)</sup> 廣田(2015)では、「クジラ構文」に見られる「間主観的認識調整」について議論している。

<sup>3)</sup> 聞き手の「説得」といっても、クジラが魚類だと思っている相手が複雑な統語形式からなる「クジラ構文」の意味を理解できるとは思えない。その意味

で、「クジラ構文」が実際に発話される文脈は限定されるといえる。

4) 認知言語学では、『合成性の原理が描く「完全な合成性」は、普通は成り立たず、合成表現の意味は、構成要素の意味の総和に還元できない側面を持つとする「部分的合成性」の立場をとる。』(辻編(2002: 73)を参照)。また、厳密には、Langacker (2009: 60)の構文分析モデルは、「構成性の原理」が単に構成部品 (building blocks) を組み立てるだけなのに対し、意味構造図の上で意味がどのように「統合」されて構成されるかを表示するものであり、意味レベルでより精確な合成構造を記述することができる。

5) 大堀・遠藤 (2012) では、「構文の意味」に関して次のように述べられている。「構文の意味は、より正確には部分の意味から全体の意味を定義するという構成性原理が単純な形では成り立たない場合に見られる。」

6) 比例的アナロジー (4項アナロジー) の具体例については、以下の文献からの引用である。1:3::3:9の関係式は、Bybee (2010: 58) を参照。MAMMALS:LUNGS::FISH:Xの関係式は、Gust et al. (2008: 8) を参照。

7) 本論の主題ではないが、クジラ構文は、よりスキーマ的なNo more A than B 構文の下位構文の1つである。一般に、ある構文ネットワーク上に位置する複数の構文間の関係は、「スキーマ (あるいは事例化)」と「拡張」の関係である。

8) 一般に、不定冠詞による名詞類のグラウンディング (a+N) は、以下のように表される。

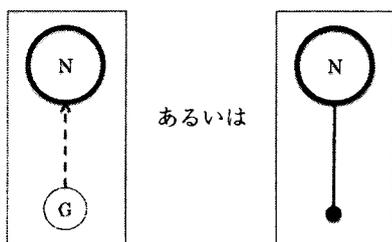


図 8

9) 「比率的数量詞」については、Langacker (2008) のみでなく、加賀・広瀬 (1997: 127-131) も参照。Langacker (2008: 292) では、all, most, someは以下のように表される。いずれも、プロファイル部が「最大拡張に対するある割合」を占めるものとして

規定される (その割合の大きさの差異が、それらの意味の差異であることを示している)。

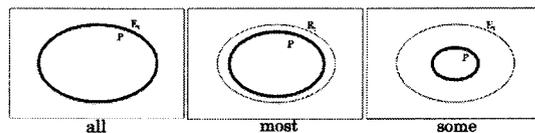


図 9

10) Langacker (2008: 116) によると、形容詞、副詞、前置詞のスキーマはそれぞれ以下のように表される。クジラ構文に表れるthanに関しては、後行命題内のisの有無に応じて、接続詞か前置詞のいずれかである (本論の直接の関心事ではないが、thanには関係代名詞の用法もある)。

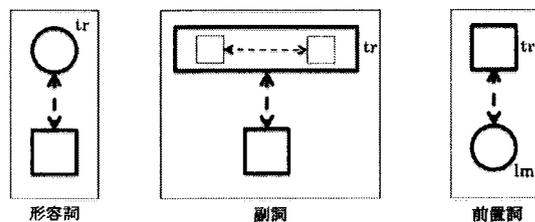


図 10

11) 「差分がゼロ」に関しては、平沢 (2014: 202) で比較構文における「差分スロット」という概念が提示されているのを参考にした。「差分スロット」とは、「比較級の直前に数量を表す語句が置かれ、比較されている二者のレベルの差分が表されることがある」と述べられている通り、例えば以下の例に見られる 'six years' という年齢差を表す名詞句のことである。

(i) He was six years older than I was, and I regarded him with reverence.

(ロレンスは僕より六つ年上だった。僕は彼を崇めていた。)

平沢 (ibid.) にならうと、「クジラ構文」では「差分スロット」を埋める要素が 'no', つまり「ゼロ」を意味するため、結果として「差分がゼロ」の解釈が導かれる。

12) 「Rhetoric (レトリック)」の起源を辿れば古代ギリシャにまで遡るが、その重要性について山梨 (2015: 60) では次のように述べられている。「日常的な感覚を越え、新たな真理を発見していくためには、言葉の慣習を越えるレトリックの視点が重要な

役割をになう。レトリックは、現実世界を新たな視点から捉え直し、創造的な世界を構築していくための重要な認識の手段であり、科学の世界、学問の世界における知の探究の手段としても重要な意味を持つと言える。」

<sup>13)</sup> これらの例文の出典は、British National Corpus (<http://bnc.jkn21.com/>) に依る。

<sup>14)</sup> なお、(6)のようにthan以下にfly to the moonをとる例は、BNCのいくつかの例文に見られた。

<sup>15)</sup> 「クジラ構文」における「ウマが魚類でない」という命題も、「百科事典的知識」にはかならない。そうした「百科事典的知識」の中に「ウマは真理条件的に明らかに魚類ではない」という「古典的カテゴリ一観」に基づいた知識が含まれているといえる。

<sup>16)</sup> この例文における「二十歳の娘」は、故ダイアナ妃のことである。

#### 【引用文献】

- Bybee, Joan (2010) *Language, Usage, and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Gust, Helmar, Ulf Krumnack, Kai-Uwe Kühnberger, and Angela Schwering (2008) "Analogical Reasoning: A Core of Cognition", *Künstliche Intelligenz*, Band 22, 8-12.
- 平沢慎也 (2012) 「クジラ構文」の構文としての意味はどこにあるか, 英語語法文法学会編, 『英語語法文法研究第19号』, 50-65, 開拓社, 東京.
- 平沢慎也 (2014) 「クジラ構文」はなぜ英語話者にとって自然に響くのか, 『れにくさ(3)』, 199-216, 東京大学.
- 廣田篤 (2015) 「No more A than B 構文の認知言語学的・語用論的分析」, 『人間社会環境研究第30号』, 22-29, 金沢大学.
- 加賀信広・広瀬幸生 (1997) 『指示と照応と否定』(中右実(編)日英語比較選書4) 研究社, 東京.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar I: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar II: Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, Oxford.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin · New York.
- 明日誠一 (2013) 「アナロジーの視点から「クジラの公式」を読み解く」, 『英文学思潮86』, 71-97, 青山学院大学.
- 大堀壽夫・遠藤智子 (2012) 「構文の意味とは何か」, 澤田治美編『ひつじ意味論講座 第2巻 構文と意味』, ひつじ書房, 東京.
- 辻幸夫編 (2002) 『認知言語学キーワード事典』, 研究社, 東京.
- 山梨正明 (2015) 『修辭的表現論－認知と言葉の技法』, 開拓社, 東京.